

ヘルマン・ヘッセの色彩語について (Ⅰ)

丹 治 信 義

I

ヘルマン・ヘッセの文学は一般によく言われているように、第一次大戦を境として、その前後では、大きな変貌を示しているが、この大戦前と大戦後の作品を、色彩語を尺度に比較検討してみても、顕著な差異が生じていることが明きらかになる。この変化には、いろいろな原因が考えられる(例えば、青春文学と老年文学という、年齢と共におのずから生れて来る変化も考えられる)が、第一次大戦というヨーロッパ世界未曾有の混乱を機に、詩人ヘッセの身に、内外から降りかかって来たさまざまな苦悩と、それを原因として患うことになった神経症とその治療の試みの中から生み出されたもの、特に精神分析学を中心にした思索が、もっとも大きな原因のひとつをなしていると思われる。

さて、先に、詩の場合について、色彩語の変化を考察してみたが、その結果を要約すると、およそ次の通りであった。

大戦前の詩(1911～1918)と大戦後の詩(1919～1928)各々30篇ずつを対象にして調査してみた場合に、どちらも約半数の詩に色彩語が使われていたが、大戦前の30篇中には28語、大戦後の方には31語用いられて、総数ではわずかながら大戦後の方が増えていた。

これに対して、色の種類では、逆に大戦前の詩の方が、多様であって、大戦後の詩にはわずかながら、特定の色への集中が見られた。然し、最も注目すべき変化は、愛用される色彩語が全く変わってしまったことであった。即ち、大戦前を代表する色彩は、blau 7, golden 5, blaß と bleich が各3、であったのに対して、大戦後は、rot 7, grün 6, grau 4 が代表的な色になっている。そして、これらの愛用される色彩語の中に、ヘッセ文学の大戦前と大戦後との大きな変化が、鮮やかに浮彫にされていたことであった。

II

さて、ここでは、小説について、色彩語の変化を考察してみたい。Text は、詩の場合と同じ Suhrkamp Verlag の Gesammelte Schriften Bd 7, (1958) を使用する。

大戦前を代表する作品として „Peter Camenzind“ (1904), „Unterm Rad“ (1906), „Gertrud“ (1910), „Roßhalde“ (1914) の4篇の小説を選び、大戦後の作品として、„Demian“ (1919), „Siddhartha“ (1922), „Der Steppenwolf“ (1927), „Narziss und Goldmund“ (1930) の4篇を選んで、各作品共にはじめから50頁を対象に、色彩語の使用数を調べてみると、次の通りである。

(大戦前の作品)

Peter Camenzind	65語
Unterm Rad	77語

Gertrud	28語
Roßhalde	64語
(大戦後の作品)	
Demian	7語
Siddhartha	34語
Der Steppenwolf	16語
Narziß und Goldmund	47語

全体的に見て、大戦前の作品には、大戦後の作品に較らべて遙るかに多くの色彩語が用いられていることが分る。これは詩の場合の28対31という比率と較べてみると、大きなちがいが見られ、興味ある問題である。

大戦前の作品と大戦後の作品と較べて、特に顕著な対照を見せているのは、„Unterm Rad“ と „Demian“ である。両作品共に、幼少年期を題材とした自伝的要素の濃い作品でありながら、一方には50頁中に77語もの色彩語が使われているのに対して、他方では、わずか7語しか色彩語が使われていないのはどうしたわけであろうか。

まず、この著しい対照を見せている二作品を中心に、大戦前の作品と大戦後の作品に見られる色彩語の用法の異同とその意味するところを考察してみる。

„Demian“ では、7語の色彩語が、特別な意味を持つことなく、個々ばらばらに用いられているのに対して、„Unterm Rad“ の77の色彩語は、幾箇所かに集中的に用いられているのが特徴である。

その代表的な例を挙げるなら、次の部分である：

So müssen Sommerferien sein! Über den Bergen ein enzianblauer Himmel, wochenlang ein strahlend heißer Tag am andern, nur zuweilen ein heftiges, kurzes Gewitter. Der Fluß, obwohl er seinen Weg durch so viel Sandsteinfelsen und Tannenschatten und enge Täler hat, war so erwärmt, daß man noch spät am Abend baden konnte. Rings um das Städtchen her war Heu- und öhmgeruch, die schmalen Bänder der paar kornäcker wurden gelb und goldbraun, an den Bächen geilten mannshoch die weißblühenden, schierlingartigen pflanzen, deren Blüten schirmförmig und stets von winzigen Käfern bedeckt sind und aus deren hohlen Stengeln man Flöten und pfeifen schneiden kann. An den Waldrändern Prunkten lange Reihen von wolligen, gelblühenden majestätischen Königskerzen, Weiderich und Weidenröschen wiegten sich auf ihren schlanken, zähen Stielen und bedeckten ganze Abhänge mit ihrem violetten Rot. Innen unter den Tannen stand ernst und schön und fremdartig der hohe, steile rote Fingerhut mit den silberwolligen breiten Wurzelblättern, dem starken Stengel und den hochaufgereihten, schönroten Kelchblüten. Daneben die vielerlei Pilze: der rote, leuchtende Fliegenschwamm, der fette, brette Steinpilz, der abenteuerliche Bocksbart, der rote vielästige Korallenpilz; und der sonderbar farblose, kränklich feiste Fichtenspargel. ………

(Unterm Rad Bd 1. S 402)

これは、Text で $\frac{2}{3}$ 頁分ほどであるが、すでに色彩語は11を算え、しかも、こうした色の汨

濫がこの先更に4頁にも亘って続いているのである。又、これらの色彩語が、ことごとく自然描写に使われているのが特色である。„Unterm Rad“には、この外にも色彩語が集中的に使われている所が幾つかあるが、これらはすべて自然描写に限られている。(この傾向は、単に„Unterm Rad“に限らず、„Peter Camenzind“の場合にも„Roßhalde“の場合にも当てはまることであり、大戦前の作品に共通する大きな特徴のひとつである。)

さて、上に引用した<自然描写>は、脇目もふらぬ長い苦しい試験勉強の後、神学校の入学試験に合格した主人公に、やっと与えられた夏休みの解放された生活を描いた部分である。長い長い試験勉強の間に、殆ど忘れ去られていた幼年時代の、あの自然と一体となったのびやかな生活の歓喜が、一時に甦えって来た感激の満ち溢れる自然描写であるが、ここに、4頁にも亘って、殆どとどまるところを知らぬ程に、自然の美が、細かに描き出されているのである。いわば、この小説の主題そのものが、自然の讃美、あるいは、美しい自然に囲まれた、素直な純朴な生活の讃美に他ならない。こうした自然讃美、素朴な田園生活の讃美は、19世紀後半の文芸思潮のひとつであった暗鬱な都市リアリズム文学に対する爽やかなアンチテーゼとしての文学史的意味も、勿論、見落せないが、ヘッセの場合には、これは多分に、彼の資質に基づくものと言ってよいのではなかろうか。例えば、処女作„Peter Camenzind“の中の、主人公 Peter の次のような言葉も、これを暗示していると思われる：

<星や山や湖は、自分らの美しさと無言の存在の苦悩を理解してくれるひとりの人をあこがれているかのようにだった。そして私がそのひとりであるかのようにであり、無言の自然を詩によって表現を与えるのが、自分の真の天職であるかのようにであった。>

さて、今一度、最初の問題であった<色彩語>という観点から、先に引用した部分のヘッセの<自然描写>を見れば、ヘッセには、詩の場合と全く同様に自然を、(画家のように)色彩で描き出そうとする傾向があると言ってよいであろう。

次に、大戦後の作品である„Demian“では、„Unterm Rad“と同じように幼少年期を題材としてはいるが、わずか7語しか色彩語が用いられていない。これは、大戦前のヘッセの作品の特徴であった。溢れ出てとどまるところを知らぬ、あの<自然描写>が、全く見られなくなったからに他ならない。即ちここでは、視点が外的自然に向けられず、ひたすら内的自然に向けられているからである。更に具体的に言うなら、この小説の主題は、自然の美を讃え、自然に囲れた素朴な田園生活への郷愁をうたうことにあるのではなく、自然の内奥にある神秘を探ること、殊に、永遠の謎である人間の魂の神秘に迫ろうという点にのみ向けられているのである。従って、僅かながら描かれる外的自然も、従来の<自然描写>とは、全くちがった視点から描かれている：

Schon als kleines Kind hatte ich je und je den Hang gehabt, bizarre Formen der Natur anzuschauen, nicht beobachtend, sondern ihrem eigenen Zauber, ihrer krausen, tiefen Sprache hingegeben. Lange, verholzte Baumwurzeln, farbige Adern im Gestein, Flecken von Öl, das auf Wasser schwimmt, Sprünge in Glas—alle ähnlichen Dinge hatten zuzeiten großen Zauber

für mich gehabt, vor allem auch das Wasser und das Feuer, der Rauch, die Wolken, der Staub, und ganz besonders die kreisenden Farbflecke, die ich sah, wenn ich die Augen schloß.
(Demian Bd. 3. S 198)

ここに見られるのは、自然の奇怪な形態を手掛りに、その奥底に隠されている神秘にひたすらに迫ろうとする姿勢であって、大戦前の美しい自然描写とは、全く異質のものである。殊に、この部分に、色彩語がひとつも使われていないのが、興味深い。

„Demian“ に用いられる 7 つの色彩語は、個々ばらばらに使われ特別に目を魅くものは全く見られないのが、„Unterm Rad“ と比べると、また大きな特色と言える。

さて、大戦後の他の作品は、„Demian“ の場合ほど極端ではない。色彩語の数からだけ見るなら、„Narziß und Goldmund“ と „Siddhartha“ とは、大戦前の作品である „Gertrud“ よりむしろ多くの色彩語が使われている。然し、これらの作品に用いられる色彩語は、大戦前の作品に見られたように自然描写に集中的に用いられることは殆どないのである。

色彩語が大戦後の作品としては例外的に多く自然描写に用いられている „Siddhartha“ の次の部分でさえ、初期作品の色どり豊かな自然描写とは、全く異って、色彩語はすべて抽象名詞として使われて、全体に簡潔な抑えられた表現となっている：

Er blickte um sich, als sähe er zum erstenale die Welt. Schön war die Welt, bunt war die Welt, seltsam und rätselhaft war die Welt! Hier war Blau, hier war Gelb, hier war Grün, Himmel floß und Fluß, Wald starrte und Gebirg, alles schön, alles rätsel-voll und magisch, und inmitten er, Siddhartha, der Erwachende, auf dem Wege zu sich selbst. All dieses, all dies Gelb und Blau, Fluß und Wald, ging zum erstenmal durchs Auge in Siddhartha ein, war nicht mehr Zauber Maras, war nicht mehr der Schleier der Maja, war nicht mehr sinnlose und zufällige Vielfalt der Erscheinungswelt, verächtlich dem tiefdenkenden Brahmen, der die vielfalt verschmäht, der die Einheit sucht. Blau war Blau, Fluß war Fluß, und wenn auch im Blau und Fluß in Siddhartha das Eine und Göttliche verborgen lebte, so war es dort eben des Göttlichen Art und Sinn, hier Gelb, hier Blau, dort Himmel, dort Wald und hier Siddhartha zu sein.
(Siddhartha, Bd 3. S 193)

以上、大戦前の作品と大戦後の作品に於ける色彩語の用法の相違について考察して来たのであるが、ここで観点を変えて、色の種類について考察するなら、次の点を指摘することが出来る。

まず、大戦後の作品に於ても、最も多く使われる色彩が、その作品の主題、構成を端的に示しているということである。(これは、詩の場合に最も明らかに現われていたのであるが)、例えば、„Siddhartha“ では、gelb と blau が、最も多く使われ、gelb は僧衣を現わし、blau は自然を意味して、自然と対峙する Siddhartha の姿が gelb と blau に明確に象徴される。

又、„Narziß und Goldmund“ 前半では、blond, schwarz, blaß が、最も多いが、blond は、髪の色形容であり、schwarz は、主に眼の色の形容として用いられ、blaß は顔色を形容してこれらは、修道院に、閉じ込められた青白い少年達の姿を鮮かに描き出しているのである。

さて、„Demian“ では、色彩語は、わずかに 7 語で目を引くものは全くないが、同じく視覚に

訴える表現として hell と dunkel のという二語が非常に多く用いられているのが印象的である。これらは、たしかに色彩語ではないが、視覚に訴える表現としては、色彩語と同等に扱ってよいと思われる。そしてこの二語も、この小説の主題である人間の魂の明暗の二元性、あるいは宇宙万物の二元性を、明確に描き出す表現となっている点では、ヘッセの、色彩語に依り、思想、感情を表現する傾向を、裏付けるものと言ってよいであろう。

こうしてみると、詩の場合に見られた、＜視覚を訴えるイメージと色彩とで、思想感情を表現する＞というヘッセの基本的な傾向は、小説の場合にも、はっきりと読み取れると言えるのである。

ところで、晩年のヘッセが水彩画を好んで描いたことは、よく知られたことであるが、ヘッセは、この水彩画を大戦後に、40才過ぎになって、はじめて描き出したのだということは興味深いことである。つまり、大戦前の、あの溢れ出るような色どり豊かな自然描写が、彼の小説から消えた時、詩人は絵筆を執っていたのである。

この水彩画をはじめて時の事情を、ヘッセは、自伝抄 „Kurzgefaßter Lebenslauf“ (1924) の中で、次のように書いている：＜自分の詩人としての存在と、自分の文学作品の価値とに対する信念は、こうしてあの変化以来（第一次大戦以来）、私のうちにおいて、根底を失ってしまった。書くということは、もはや私に本当の喜びを与えなかった。……ある日のことだ、私はまったく新しい喜びを発見したのだ。もう40才になっていたが、その私が、突然、絵を描きはじめてのだ。＞

複製で見ると限りでは、ヘッセの水彩画は、単純な構成と独特の渋い色調から成る個性的な絵であるが、描かれる対象に注目すれば、これが殆ど風景だけに限られていることに気が付く、即ち、この水彩画は、小説に見られた色彩語の著しい減少という変化と明確に呼応するものであり、初期のヘッセの特徴であった＜無言の自然に詩によって表現を与える＞、あの色どり豊かな＜自然描写＞の代償に他ならないと言ってもよいのである。